

子どもの勇気に関する基礎研究（その2）

—— self-regulation との関係 ——

大塚 健 樹

問題と目的

大塚・中島は、個性化教育の方向性を考える方策として、勇気を阻害されない教育をテーマとして位置付け研究を行ってきた。それは、伝統的な日本型合意社会のもとで個性を発揮し、行動していくためには、今はまだ困難な状況にあり、少なからず勇気のいる行為であると捉えるからである。そして、ここでいうところの勇気とは、“自己を奮い立たせて、自分の価値観に基づき、他者からの抑圧や自身の内面に内在する否定的な感情の葛藤に打ち勝って、自身の意志を発揮する”という側面を指し示している。

以上の点を踏まえ、前回、大塚・中島（1993）は、児童期後半の子どもたちの「自己の勇気度」、「21項目の行動についてどの程度勇気が必要かという勇気に対する意識面と実際にどの程度できるのかという勇気に対する行動面」、「勇気があると思われる人物」それぞれについて分析し、報告を行った。今回は、特に「21項目の行動についてどの程度勇気が必要かという勇気に対する意識面と実際にどの程度できるのかという勇気に対する行動面」と自己制御(self-regulation)機能との関係に焦点をあて、分析された部分についての報告が行われる。

自己制御という概念の中には、柏木（1988）が指摘するように二つのあり方が認められる。一つは自分の欲求や行動を抑止し制止する働きである。子どもは日常生活の中で自ずと自分の欲求、衝動をそのまま発動してはいけない場面や抑制すべき状況があることを知っていく。いわゆる耐性とか抑制、制止と呼ばれるものであり、これらを以後、総称して行動抑制と呼ぶ。二つ目が、この行動抑制とは逆に、自分の意志、欲求を明確にもち、これを外に向かって表し実

現するという面である。これは、自立、自己主張、反抗などの現象として発現する。このような面を先の行動抑制に対して、自己主張とよぶ。

これら2つの側面を含み持つ自己制御機能は、勇気の発動との関連において、行動抑制とは負の相関を持ち、自己主張は正の相関を持つと推測される。それは、行動抑制の高い子どもは、自己の内面に内在する否定的な感情の葛藤に打ち勝ったとしても、それが直ちに自己の意志の発現つまり勇気を発動することにつながるとは考えにくく、逆に、自己主張の強い子どもは、明確な自己の価値観を形成しやすく、それに基づいた行動をとるつまり自身の意志を発揮するという（勇気を発動しやすいという）特徴を示すと思われるからである。これらの観点に立って、勇気と自己制御との関係を明らかにしていくことが本研究の第一の目的である。

また、本研究で使用している勇気に関する項目は標準化されたものではない。したがって、当然のことながら信頼性、妥当性に疑問が残る。これは、勇気に関する先行的な研究が現時点で見あたらなかったという事情で、独自に勇気に関する設問項目を設定したことによるためである。そこで、標準化された自己制御スケールと比較することにより、それらの点の検討を行うことも本研究の目指す目的の一つとなる。

方 法

1. 調査対象

調査対象は前回の報告と同様の子どもたちで、北海道小樽市にある小学校の4年生から6年生の330名である。内訳は、4年生が96名（男児：48名、女児：48名）、5年生が58名（男児：31名、女児：27名）、6年生が176名（男児：89名、

女兒：87名）である。

2. 調査項目

調査項目は、勇気の部分に関しては、前回の報告通りであり、本研究では、設問項目Ⅰ（勇気が必要と思う行動）とⅡ（自分自身の行動評定）が使用された。また、この部分に関して本研究の分析では、設問ⅠとⅡとも前回の報告で得られた、それぞれの因子分析後の積算得点が用いられている（前回の報告参照）。

自己制御機能に関しては、西野（1989）が開発した SRC (Self Regulation for Children)-II スケールを採用した（資料1参照）。ただし、このスケールは幼児用として開発されたものであったので、本研究の調査対象が児童であることを鑑み、調査の実施に際しては語句の言い回し等の若干の変更を行っている（資料2の1と2参照）。SRC-II スケールは、46の設問項目からなっており、本研究ではそれぞれの設問項目において‘よくあてはまる’の場合には1, ‘どちらかといえばあてはまる’の場合には2, ‘あてはまらない’の場合には3として点数化され、統計処理が行われ、分析・検討がなされている。

結果と考察

1. 平均値でみる自己制御機能

Table 1 に、自己制御機能に関する平均値と標準偏差が、4年生・5年生・6年生の学年別と学年を総じた全体とに分けて示されている。

46の設問項目について、標準偏差を考慮に入れながら全体の平均値で概括すると、1.23（最低点）から2.56（最高点）の間にあり、しかも2.50（四捨五入も含めて）以上の設問項目が3つ（設問項目番号：14・21・36）と少ないことがわかる。したがって、全体の平均値で見ると、児童期後半の子どもたちにとって、ここで示された46の設問項目は総じて、‘よくあてはまる’から‘どちらかといえばあてはまる’に近い範囲のものだといえる。しかし、設問項目番号14の“なんでも自分で決めないと気がすまない”や21の“活発に動きまわる遊びより、静かな遊び

のほうが好きだ”，36の“こまったことがあるとメソメソしたり、泣き出してしまうほうである”などは、2.50以上（四捨五入も含めて）の平均点にあり、どちらかというところ‘あてはまらない’という傾向を示している。このことから、これら3つの設問項目は、すでにこの年齢段階の子どもたちにとって不要の設問内容になっているのかもしれない。

次に、各学年ごとの平均点を概括すると以下の特徴を見い出すことができると思われる。それは、前回の報告の勇気度、設問Ⅰ・Ⅱで認められた「4年生段階の児童は自己を肯定的に評定する傾向があり、5年生は比較的否定的に、そして6年生はどちらともいえないという曖昧な評定をする。」という傾向が、自己制御機能に関する46の設問項目中14項目（設問項目番号：1・5・7・10・13・15・16・19・21・22・23・25・42・44）に認められたという点である。なお、これらは全て多重比較による検定の結果、95パーセント以上の有意差の認められた項目である。3分の1弱の設問項目に勇気に関する評定と同じ傾向が認められたことは、自己制御機能の評定においても、少なからず、前回の報告と同様に「加年齢とともに自己をはっきりとどちらかに位置づけることを嫌う傾向」を読み取ることができるものと思われる。まさに日本型合意社会の様相が自己制御機能の評定においても認められるのである。

さらに、加年齢とともに有意差をもって‘あてはまらない’という方向に評定された項目が4つ（設問項目番号：6・18・31・35）認められた。このうち、設問項目番号31の“いちど言い出したらほかの人の言うことは聞かないほうである”は、前述の特徴をより端的に表しているのではないと思われる。

2. 因子分析からみる自己制御機能

自己制御機能の設問項目についての直接バリマックス法による因子分析結果が Table 2 に示されている。これにより、抽出された解釈可能と思われる因子は、5つである。それぞれの因子寄与は、Ⅰ因子（F 1）が5.5830で、Ⅱ因

大塚：子どもの勇気に関する基礎研究（その2）

Table 1 自己制御機能の平均と標準偏差

(上段：平均／下段：標準偏差)

設 問 項 目	全 体	4 年 生	5 年 生	6 年 生
1. 親や先生から「待って」と言われれば、今やりたいと思うことでも我慢できる。	1.7667 0.6359	1.5521 0.6134	2.1207 0.6234	1.7670 0.6021
2. 友だちと遊ぶとき、自分のやりたい遊びややりたいことが、はっきり言える。	1.5562 0.6839	1.4842 0.6663	1.6034 0.7240	1.5796 0.6799
3. 新しいことをするのに時間がかかる。	1.8085 0.7486	1.7684 0.7064	1.8103 0.7364	1.8295 0.7742
4. ほしいものがすぐに手に入らなくても我慢することができる。	1.5606 0.7203	1.5000 0.7539	1.7069 0.7257	1.5455 0.6995
5. ほかの子がルールをやぶったら注意する。	1.6879 0.6602	1.5104 0.5982	1.7931 0.6948	1.7500 0.6803
6. じっくり考えてからでないと、行動できない。	2.1520 0.7649	1.9896 0.7880	2.0526 0.7658	2.2727 0.7518
7. だれかに自分の使っているものを「かして」と言われたら、かしてあげられる。	1.5061 0.6366	1.3542 0.5616	1.6724 0.7348	1.5341 0.6405
8. 自分から進んで「あれやろう」「これやろう」と言って友だちを引っ張っていきける。	1.9697 0.7368	0.8271 0.8239	1.9310 0.7692	2.0057 0.7368
9. 自分から進んで何かをやるというほうではない。	2.1364 0.7352	2.1250 0.8240	2.1034 0.7179	2.1534 0.6881
10. いやなことがあっても、すぐに怒ったりしない。	2.1848 0.7333	2.0521 0.7591	2.3793 0.7213	2.1932 0.7228
11. 自分の順番なのにほかの子がわりこんできたら、「だめだよ、私のぼんだよ」と言える。	1.4061 0.6246	1.2917 0.5413	1.3966 0.5601	1.4716 0.6839
12. 失敗したことなどをクヨクヨ考えてしまうほうである。	1.9606 0.8247	1.9583 0.8574	1.6379 0.7422	2.0682 0.8321
13. 人からいちいち注意されなくても、「してはいけない」と言われたことはしない。	2.0030 0.6929	1.7604 0.6920	2.0862 0.6565	2.1080 0.7049
14. なんでも自分できめないと気がすまない。	2.4909 0.7338	2.3438 0.7924	2.4138 0.7017	2.5966 0.7106
15. 新しい遊びやゲームなどには初めからなかまに入らないで、そばで見ているほうである。	2.3222 0.8066	2.1263 0.8659	2.3103 0.8209	2.4318 0.7679
16. なんにでも我慢強く、コツコツと取り組むほうである。	2.1763 0.7330	2.0625 0.7372	2.3276 0.7348	2.1886 0.7302
17. 気に入ったことであれば、自分から進んでやりたいと言うほうである。	1.5502 0.6806	1.4167 0.6754	1.6034 0.6473	1.6057 0.6940
18. 知らない子に合うとはずかしい気持ちになる。	2.1394 0.8081	1.9271 0.8110	1.9483 0.8255	2.3182 0.8006
19. 勝ち負けのある遊びでたとえ負けてもあまり気にならないほうである。	1.8970 0.8300	1.7500 0.8335	2.0172 0.8479	1.9375 0.8222
20. ほかの子からいやなことをされても、「いや」とか「やめて」と言える。	1.3970 0.5806	1.3229 0.5330	1.4138 0.5630	1.4318 0.6103
21. 活発に動きまわる遊びより、静かな遊びのほうが好きだ。	2.5636 0.7196	2.3021 0.8720	2.5862 0.7263	2.6989 0.6189
22. 約束ごとやきまりなどはすぐに覚えてそれをまもるほうである。	2.1459 0.6474	1.8229 0.7107	2.2241 0.6225	2.2971 0.6184
23. 遊びたいおもちゃや遊具（ボールなど）をほかの子が使っているとき、「私にもかして」と言える。	1.4498 0.6696	1.3053 0.6027	1.5862 0.7731	1.4830 0.6674

設 問 項 目	全 体	4 年 生	5 年 生	6 年 生
24. 一度いやだなと思うと、なかなか直らない。	1.9240 0.7166	1.8947 0.7646	1.7931 0.7196	1.9830 0.6885
25. おもちゃや道具など、友だちと交代しながら使える。	1.4417 0.6675	1.3656 0.6722	1.6207 0.6965	1.4229 0.6553
26. なにかを話したり、表現したりするとき、おおげさに言ったり表現したりする。	2.2256 0.7581	2.1895 0.8289	2.0000 0.7319	2.3182 0.7258
27. なにかを決める（決断する）のに時間がかかるほうである。	1.7165 0.7613	1.6915 0.7901	1.7759 0.7503	1.7102 0.7492
28. 思いどおりにいかないとおこってしまうほうである。	2.2614 0.7625	2.2632 0.8017	1.9828 0.7607	2.3523 0.7413
29. 自分の気持ちをすなおに話したり表現したりするほうである。	2.0942 0.7301	2.0947 0.7448	2.1552 0.7678	2.0739 0.7093
30. ものごとのちょっとした変化にもよく気がつくほうである。	1.8537 0.7320	1.7789 0.7463	1.9138 0.6565	1.8743 0.7475
31. いちど言い出したらほかの人の言うことは聞かないほうである。	2.3712 0.7392	2.2581 0.8328	2.2586 0.7148	2.4686 1.6931
32. やってみたい遊びや活動に自分から「いれて」と言える。	1.3792 0.6288	1.3617 0.6367	1.4912 0.7102	1.3523 0.5960
33. どうしたらいいかと悩むことなく、新しい遊びや仲間に入ることができる。	1.6170 0.7109	1.5579 0.6952	1.7241 0.7205	1.6136 0.7160
34. 今やっていることがすぐにできないと、ほかのことを始めるほうである。	2.1189 0.8186	2.1579 0.8790	2.0345 0.7940	2.1257 0.7923
35. ケンカをしていたり、いじめられている子を見ると先生やお母さんなどにいつけにいこうほうである。	2.2835 0.7520	2.0632 0.8197	2.0862 0.7559	2.4686 0.7175
36. こまったことがあるとメソメソしたり、泣き出してしまうほうである。	2.5410 0.6955	2.4211 0.7660	2.6207 0.5872	2.5795 0.6882
37. 「かして」といわれても、気に入ったものはかせないほうである。	2.1489 0.8327	2.1263 0.8283	1.8448 0.8122	2.2614 0.8417
38. ほかにのことに気をとられると、今、自分のしていたことをわすれてやめてしまうほうである。	1.9297 0.8199	2.0532 0.8343	1.7368 0.7203	1.9261 0.8419
39. 「なんとかをしなさい」と言われても、「いやだ」と言って人の言うことをきかないほうである。	2.1854 0.7256	2.2737 0.7357	2.0345 0.7246	2.1875 0.7204
40. 自分一人でするなと思って、すぐ誰かに助けてもらうほうである。	2.1976 0.7596	2.2105 0.8108	2.1552 0.6702	2.2045 0.7583
41. ほかにの子から親切にされたら、「ありがとう」とお礼が言える。	1.2530 0.5036	1.2737 0.5145	0.3860 0.5263	1.1989 0.4901
42. 動きがのろいほうである。	2.2340 0.7956	2.0632 0.8097	2.2069 0.7894	2.3352 0.7900
43. 友だちと仲良く遊ぶのは、上手である。	1.7933 0.6305	1.8632 0.6459	1.9138 0.6292	1.7159 0.6224
44. ゲームや勝負に負けると、すぐにきげんが悪くなるほうである。	2.3853 0.7770	2.3404 0.8237	2.0517 0.8670	2.5200 0.7179
45. うるさかったりさわがしかったりするところでも、自分のしていることに集中できる。	2.1216 0.7912	2.0211 0.8249	2.3103 0.7770	2.1136 0.7773
46. 新しいものが好きである。	1.3171 0.5563	1.2632 0.4884	1.3621 0.5833	1.3314 0.5812

子（F 2）が3.8838, III因子（F 3）が2.2651, IV因子（F 4）が1.9037, V因子（F 5）が1.7457であった。したがって、F 1が極端に大きく、ついでF 2とF 3が中程度、F 4とF 5が小さいということがわかった。因子数およびその後の解釈に問題を残すと思われるが、本研究では、この5つで解釈を行うこととした。以下にそれぞれの因子の解釈を示す。

- ① F 1 因子において因子パターンの高い設問項目番号は、順に、20, 11, 33, 2, 23, 5, 11である。これらの設問項目は、因子負荷量の高い項目（20, 11）の内容などから遊び場面における自己主張に関するものから成っており、「遊び場面における自己主張に関する自己制御」と命名することとした。
- ② F 2 因子において因子パターンの高い設問項目は、順に、28, 14, 31, 44, 39, 41であった。これら6つ設問項目は、因子負荷量の高い項目（28, 14）の内容などから自己の感情制御に関するものと考えられる。そこで、このF 2 因子は、「感情の自己制御に関する自己制御」と命名することとする。
- ③ 同様にF 3 因子においては、16, 30, 29, 42の設問項目が得られた。これら4つの設問項目は、因子負荷量の高い項目（16, 30）の内容から、物事に取り組む際に示す自己の基本的な行動特性を現すことに関する自己制御と解釈し、「自己の基本的な行動特性に関する自己制御」と命名することとした。
- ④ さらに、F 4 因子からは、因子パターンの高い順に、13, 22, 1, 6, 21の5つの設問項目が得られた。これら5つの設問項目は、因子負荷量の高い項目（13, 22）の内容などから、自分を抑えてルールを守ることや自己の感情を抑えて耐えるということを指し示していると考えられると思われるので、「自己抑制・耐性に関する自己制御」と命名することとした。
- ⑤ 最後に、F 5 因子からは、同じく順に、

34, 38, 26, 15, 40の5つの設問項目が得られた。これら5つの設問項目は、因子負荷量の高い項目（34, 38）の内容から、物事に対する意志の表現の仕方や主張の仕方に関するものと考えられたので、「自己表現・自己主張に関する自己制御」と命名することにした。

以上、F 1 からF 5 までの5つの因子が得られそれぞれの意味内容が解釈された訳であるが、これら5つの因子に含まれた設問項目は46の設問項目中27項目である。残りの19項目は、因子負荷量が小さかった（.350以下）ことと因子論的にまとまりを成していなかったとの理由で、今回の分析からは除外されることとなった。

また、本研究で得られた5つの因子中、F 1, F 2, F 4, F 5 の因子は、前述の柏木や西野の幼児における因子分析から抽出された因子内容とオーバーラップするものであるが、F 3 因子は本研究で独自に得られた内容のものであると思われる。この辺の事情は、同じ内容の調査を幼児に対して実施（評定は、母親や教師が行っている）した場合と児童に対して行った（児童自身が評定）場合の微妙な違いとして考慮する必要があることを示唆しているものと推察される。したがって、調査を実施する場合には、調査対象の年齢および評定者の選定に考慮しながら、十分な内容の検討をしておくことが肝要と思われる。本研究の場合も、因子分析においてかなりの項目が分析から除外される結果となっているので、特に以上のことが反省点として、また、今後の課題として残る。

3. 因子分析後の積算結果に基づく学年別自己制御

因子分析で抽出された5つの因子に基づき、それらに属する設問項目を積算し、学年ごとの平均と標準偏差、そして分散分析および多重比較を行った。それらの結果を示したのが Table 3 である。

まず最初に、平均値で各因子をみると、F 1 の「遊びにおける自己主張に関する自己制御」が各学年とも1.50前後の値で‘よくあては

Table 2 自己制御項目における因子分析

設 問 項 目	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5
1. 親や先生から「待ってて」と言われれば、今やりたいと思うことでも我慢できる。				.47492	
2. 友だちと遊ぶとき、自分のやりたい遊びややりたいことが、はっきり言える。	.61325				
3. 新しいことをするのに時間がかかる。					
4. ほしいものがすぐに手に入らなくても我慢することができる。					
5. ほかの子がルールをやぶったら注意する。	.56509				
6. じっくり考えてからでないと、行動できない。				.43281	
7. だれかに自分の使っているものを「かして」と言われたら、かしてあげられる。					
8. 自分から進んで「あれやろう」「これやろう」と言って友だちを引っ張っていきける。	.56225				
9. 自分から進んで何かをやろうというほうではない。					
10. いやなことがあっても、すぐに怒ったりしない。					
11. 自分の順番なのにほかの子がわりこんできたら、「だめだよ、私のばんだよ」と言える。	.67211				
12. 失敗したことなどをクヨクヨ考えてしまうほうである。					
13. 人からいちいち注意されなくても、「してはいけない」と言われたことはしない。				.67783	
14. なんでも自分できめないと気がすまない。		.69904			
15. 新しい遊びやゲームなどには初めからなかまに入らないで、そばで見ているほうである。					.39468
16. なんにでも我慢強く、コツコツと取り組むほうである。			.63250		
17. 気に入ったことであれば、自分から進んでやりたいと言うほうである。					
18. 知らない子に合うとはずかしい気持ちになる。					
19. 勝ち負けのある遊びでたとえ負けても気にならないほうである。					
20. ほかの子からいやなことをされても、「いや」とか「やめて」と言える。	.74728				
21. 活発に動きまわる遊びより、静かな遊びのほうが好きだ。				.42937	
22. 約束ごとやきまりなどはすぐに覚えてそれをまもるほうである。				.58008	
23. 遊びたいおもちゃや遊具（ボールなど）をほかの子が使っているとき、「私にもかして」と言える。	.58598				
24. 一度いやだなと思うと、なかなか直らない。					
25. おもちゃや道具など、友だちと交代しながら使える。					
26. なにかを話したり、表現したりするとき、おおげさに言ったり表現したりする。					.41076
27. なにかを決める（決断する）のに時間がかかるほうである。					
28. 思いどおりにいかないとおこってしまうほうである。		.69485			
29. 自分の気持ちをすなおに話したり表現したりするほうである。			.49462		
30. ものごとのちょっとした変化にもよく気がつくほうである。			.55861		
31. いちど言いだしたらほかの子の言うことは聞かないほうである。		.53270			
32. やってみたい遊びや活動に自分から「いれて」と言える。					
33. どうしたらいいかと悩むことなく、新しい遊びや仲間に入ることができる。	.63154				
34. 今やっていることがすぐにできないと、ほかのことを始めるほうである。					.71119
35. ケンカをしていたり、いじめられている子を見ると先生やお母さんなどにいいつけにいくほうである。					
36. こまったことがあるとメソメソしたり、泣き出してしまうほうである。					

設 問 項 目	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5
37. 「かして」といわれても、気に入ったものはかせないほうである。					
38. ほかにのことに気をとられると、今、自分のしていることをわすれてやめてしまうほうである。					.58276
39. 「なんとかをしなさい」といわれても、「いやだ」と言って人の言うことをきかないほうである。		.40380			
40. 自分一人のできるなと思っても、すぐ誰かに助けてもらうほうである。					.37056
41. ほかに子から親切にされたら、「ありがとう」とお礼が言える。		.38183			
42. 動きがのろいほうである。			.45805		
43. 友だちと仲良く遊ぶのは、上手である。					
44. ゲームや勝負に負けると、すぐにきげんが悪くなるほうである。		.51775			
45. うるさかったりさわがしかったりするところでも、自分のしていることに集中できる。					
46. 新しいものが好きである。					

まる'と'どちらかといえばあてはまる'の間に
あるのに対し、他のF 2からF 5は各学年とも
2.00前後の値で'どちらかといえばあてはまる'
を示していることがわかる。このことから、平
均でみる限り、F 1以外のは、比較的曖昧な反
応が見られた因子として位置づけられると思わ
れる。

次に、分散分析の結果でみると、有意な
差が認められたのがF 2, F 3, F 4の3つで
あった。さらに、これら3つを多重比較によっ
て学年毎の差を検定した。それによると、F 2
の「感情の統制に関する自己制御」では、5年
生が'どちらかといえばあてはまる'という傾向
にあり、4年生と6年生が5年生とは有意差を
もって'あてはまらない'という方向にあること
が示された。そして、F 3の「自己の基本的行
動特性に関する自己制御」では、4年生が'ど
ちらかといえばあてはまる'あり、5年生と6
年生は4年生より有意差を持って'あてはまら
ない'方向にあることが、さらに、F 4の「自
己の統制・自己実現に関する自己制御」も同様
の傾向を示していることが認められた。

これらのことから、感情の統制に関しては、
5年生が他の学年よりできていないということ。
そして、基本的行動特性において自己制御を発
揮するのは4年生であり、さらにこの4年生は
自己の感情を統制し耐えることでも他の学年よ
り自己制御を発揮していることが明らかにされ

た。総合すると、6年生が最も自己制御を発揮
していないことが示されたように思われる。こ
れは、ある意味では、6年生段階になるとまわ
りの状況に迎合し、自己判断によって行動する
ではないということを示唆しているものであり、
まさに日本型合意社会の影響を受けているもの
と推論させるものである。

4. 勇気と自己制御との相関関係

本研究で得られた自己制御に関する5つの因
子と、先の研究で得られた「勇気が必要と思う
行動（設問Ⅰ）」と「自分自身の行動評定（設
問Ⅱ）」との相関関係がTable 4に示されてい
る。以下に、自己制御機能からみた、勇気に関
する設問Ⅰ・Ⅱとの関係について述べる。

〈F 1と設問Ⅰ・Ⅱとの関係〉

F 1の「遊びにおける自己主張に関する自己
制御」と設問Ⅰの「勇気が必要と思う行動」の
5つの因子とは、全て有意な負の相関関係が
認められている。したがって、自分は自己主張
が強いと自己評定する子どもは、設問Ⅰの5つ
の因子において勇気がそれほどいらない行動で
あると評定しているといえる。しかも、設問Ⅱ
の5つの因子とは、有意な正相関を示している
ので、行動面でも自分はそれらができると評定
している。

これらのことから、自己主張の強い子どもは、

今回調査した勇気に関する21の設問項目に対しては、勇気がいらなくて、しかも自分ではできると評定する傾向をもっているといえる。したがって、自己主張の強い子どもは、自分の価値観に基づき、他者からの抑圧や自身の内面に内在する否定的な感情の葛藤に打ち勝って自身の意志を発揮するという勇気を特性として備えているといえよう。

しかし、その特性をどのようにして備えたかについては、今後の検討課題といえよう。ただ、自己主張に限っていえば、東・柏木・ヘス (1981) が指摘するように、これは、米国で良い子とされる特性の一つである。その意味では、米国で行われている教育が、この自己主張を育てそれを特性として備えることに対して示唆を与えるものと思われるが、これも東・柏木・ヘスが指摘するように、必ずしもそのやり方が日本の中で直接的に、そして有効に働くとは考えにくい。日本の社会の特徴、文化の特徴を踏まえて検討していかなければならないものであると思われる

るのである。

〈F 2 と設問 I・II との関係〉

F 2 の「感情の統制に関する自己制御」と設問 I の 5 つの因子との関係で相関関係が認められたは、因子 II の「素直の勇気」だけで、しかも、それほど強い相関とはいいいくようである。このことから、自己の感情を統制すなわち抑制すると評定する子どもは、素直になることに対して勇気が必要であると評定する傾向を持つようである。自己の感情を抑制すること事態は、ある意味では先の自己主張とは、反する面を含み持っていると思われるで、この結果は当然のことと考えられる。また、設問 II との関係では、「正直の勇気」と負相関しており、自己の感情を抑制する傾向を持っている子どもは、行動面でもできないと自己を評定しており、この点を裏付けているといえよう。

以上のことから、自己の感情を抑制する傾向の強い子どもは、他者からの抑圧や自身の内面

Table 3 自己制御項目における因子分析後の各因子積算結果 (学年別)

因子積算後の項目	学年	平均		分散分析表				
		M	SD	SS	df	MS	F	多重比較結果
F 1 : 遊びにおける自己主張に関する自己制御	4 年生	1.470	0.394	1.089	2	0.545	2.960 n.s.	
	5 年生	1.623	0.406					
	6 年生	1.586	0.453					
F 2 : 感情の統制に関する自己制御	4 年生	2.125	0.412	1.703	2	0.852	5.409 **	6 年生 = 4 年生 > 5 年生
	5 年生	2.026	0.391					
	6 年生	2.217	0.390					
F 3 : 自己の基本的行動特性に関する自己制御	4 年生	2.000	0.388	1.163	2	0.582	4.110 *	5 年生 = 6 年生 > 4 年生
	5 年生	2.151	0.357					
	6 年生	2.122	0.376					
F 4 : 自己制御・耐性に関する自己制御	4 年生	1.885	0.414	7.999	2	4.000	27.226 ***	6 年生 = 5 年生 > 4 年生
	5 年生	2.218	0.349					
	6 年生	2.232	0.376					
F 5 : 自己表現・自己実現に関する自己制御	4 年生	2.140	0.513	1.027	2	0.514	2.538 n.s.	
	5 年生	2.050	0.372					
	6 年生	2.202	0.436					

注) * : $p < .05$ ** : $p < .01$ *** : $p < .001$ n.s. : 有意差なし = : n.s. > : $p < .05$ > : $p < .01$

に内在する否定的な感情の葛藤に打ち勝っているのかもしれないが、自身の意志を発揮するという点において、勇気の発動を抑えていると推察される。こうした特性が、日本型合意社会を形作っているのではないかと思われる。

〈F 3 と設問 I・II との関係〉

F 3 の「自己の基本的行動特性における自己制御」と設問 I の 5 つの因子とは、相関関係が認められなかった。設問 II とでは、因子 IV を除いた 4 つの因子と有意な正の相関関係が認められた。このことから、自己制御に関連した自己の行動特性と勇気との関係においては、意識面

との関連は無いが、行動面と関連をもっているといえる。

特に、設問 II の因子 II と比較的強い結びつきを示しており、注目される。やはり、自己制御において自分が積極的な特性を持っている評定している子どもほど積極性を持った勇気の発動をしているものといえるのであろう。自己主張の強さもそうであるが、勇気を発揮するためには積極的な行動力が必要とされるのであろう。

〈F 4 と設問 I・II との関係〉

F 4 の「自己抑制・耐性に関する自己制御」と設問 I の因子と有意な相関が認められたのは、

Table 4 勇気と自己制御との相関関係

(上段：相関係数／下段：有意水準)

	因子積算後の項目	F 1：遊びにおける自己主義に関する自己制御	F 2：感情の統制に関する自己制御	F 3：自己の基本的行動特性における自己制御	F 4：自己抑制・耐性に関する自己制御	F 5：自己表現・自己実現に関する自己制御
勇気が必要と思う行動（設問 I）	因子 I：正義の勇気	-.3536 ***	-.0038 n.s.	-.0274 n.s.	.1279 *	.1875 ***
	因子 II：素直の勇気	-.1383 **	.0997 *	.0657 n.s.	.1139 *	.2027 ***
	因子 III：恐れ of 勇気	-.0925 *	.0226 n.s.	-.0221 n.s.	.1099 *	.0569 n.s.
	因子 IV：照れの勇気	-.2310 ***	.0345 n.s.	.0119 n.s.	.1475 **	.2081 ***
	因子 V：平然の勇気	-.1420 **	.0602 n.s.	-.0076 n.s.	.0426 n.s.	.1077 *
自分自身の行動評定（設問 II）	因子 I：正直の勇気	.2768 ***	-.1015 *	.0987 *	.0945 *	-.0705 n.s.
	因子 II：積極性の勇気	.5120 ***	.0536 n.s.	.2302 ***	.0849 n.s.	-.1117 *
	因子 III：挑戦の勇気	.3161 ***	.0752 n.s.	.0973 n.s.	-.1487 **	-.0770 n.s.
	因子 IV：耐える勇気	.2782 ***	-.0215 n.s.	.0530 n.s.	-.0565 n.s.	-.1102 *
	因子 V：圧力に対する勇気	.4318 ***	.0757 n.s.	.1301 **	-.1215 *	-.1072 *

注) *：p<.05 **：p<.01 ***：p<.001 n.s.：有意差なし

因子Vを除く4つの因子であった。したがって、自己抑制・耐性の強い子どもは、正しいことに対してや素直になること、および恐れを抱く場面、照れる場面では勇気が必要であると意識するようである。このことは、設問IIの行動面における勇気で因子IIIや因子Vと有意な負の相関を持つことから裏付けられよう。したがって、自己抑制・耐性の強い子どもは、何かに挑戦したり、まわりからの圧力がかかる場面では、自分を押さえてしまい、自分の意志を発揮すること自体を押さえてしまうのであろう。

この抑制の強さや耐性の強さは、実は前述の東・柏木・ヘスらが指摘する日本型の良い子の特性である。日本では、おとなしく温和であること、すなわち感情を抑え、従順であることが子どもの頃から求められる傾向にある。これが、日本型合意社会の根幹を成すものであろう。しかし、だからといって必ずしもこの特性を持つことが、勇気つまり本研究で目的としているところの個性を発揮しないこととは直接的にはつながらないであろう。肝要なのは、「どの場面で、どの様なタイミングで発揮する」であろう。この点を踏まえた上での、積極性を持った自己主張のあり方を考え、それを教育の中に取り入れていくことが必要であると考ええる。

〈F5と設問I・IIとの関係〉

F5の「自己表現・自己実現に関する自己制御」と設問Iの5つの因子と有意な正の相関を持つのは、因子I・II・III・IVの4つであった。このことから、自己表現の弱い子どもは、恐れに対して以外は、勇気が必要であると意識する傾向が強いようである。このことが、行動面、すなわち設問IIの因子II・IV・Vと負の相関を持っていることから裏付けられる。

したがって、自己表現が弱く、自己実現を達成しにくい子どもは、勇気を発揮する、すなわち自分の意志を発揮するという面で弱さを持っているものといえる。この、自己表現・自己実現という概念には、自己主張・積極性などが含まれると考えられるので、その意味からも先に述べたことがさらに裏付けられるものと思われる。

今後の課題

本研究は、勇気の発動ということを個性を発揮する鍵として捉え、個性化教育の方向性を探ることを目的としてきた。前回の報告では、子どもたちの勇気の現況を探ることを中心に分析・検討された。そして、今回の報告では、特に、自己制御機能と勇気との関連を中心に検討してきた。

以上のような流れの中で、4年生段階の子どもは自分を勇気ある存在と捉える傾向が強く、5年生はむしろ自己を否定的に捉える傾向にあること、そして、6年生は、自己を曖昧な存在に捉える傾向にあることがわかり、自己制御機能においてもこれに近い傾向が示された。さらに、勇気が発揮されやすい子どもは自己主張や自己表現傾向が強く積極性を持っていることが、逆に発揮されにくい子どもは自己の行動特性を消極的な方向に捉え自己を抑制し耐性の強い特徴を持っていることが示された。

今後、前回の報告と本研究で示された結果とを踏まえ、個性化教育の在り方についての方向性を検討していかなければならない。その際、個性を発揮するという視点からだけではなく、それを受けとめる側からの視点も含めて見ていかなければならないことを痛感している。なぜならば、個性化教育を必要とする社会は、高度情報化社会であり、その社会は情報を発信する側の問題はもちろんのこと、それを受信する側の問題も含み持っているからである。すなわち、発信された情報をどう処理するかという問題である。

本研究から、個性を発揮する鍵は、積極性及び自己主張ということであると推測されるが、日本の文化の中でそれをどう位置づけ教育の中で考えるかは、慎重を期す問題であるといえる。これまでのように、欧米の考え方、あり方を取り入れるだけでは、なかなか解決しないように思える。日本独自のあり方を考えていく必要性を感じる。

文 献

- 1) 東洋・柏木恵子・Hess, R. D. 1981 母親の態度・行動と子どもの知的発達 東京大学出版会
- 2) 柏木恵子 1988 幼児期における「自己」の発達 東京大学出版会
- 3) 大塚・中島 1983 子どもの勇気に関する基礎研究（その1）盛岡大学短期大学部紀要第3巻（通巻第16号）9-26.
- 4) 西尾幹二 1982 教育と自由 新潮選書
- 5) 西野泰広 1987 幼児期における母親のしつけパターン—自己教育的しつけ尺度の開発—豊橋短期大学研究紀要4, 73-90.
- 6) 西野泰広 1988 幼児の Self-Regulation 機能の因子論的研究 豊橋短期大学研究紀要5, 75-83.
- 7) 西野泰広 1989 幼児の PDS 検査の開発の予備的試み 豊橋短期大学研究紀要6, 111-117.
- 8) 西野泰広 1989 5歳児の描画と自己制御機能 豊橋短期大学研究紀要6, 59-75.

〈資料1〉

SRC-II

つぎの1)～46)の項目について、お子さんにそうした傾向がかなり認められる場合には3を、どちらかといえば認められる場合には2を、まったく認められない場合には1を、回答欄にご記入ください。あまり深く考え込まずに、最初に頭に浮かんだイメージで、すべての項目に回答してください。

- 01 () 「待ってて」と言えば、やりたいことでも我慢することができる。
- 02 () 遊びのやり方や遊びの役割など、自分のしたいことをはっきり言える。
- 03 () 新しい状況になれるのに時間がかかる。
- 04 () 欲しいものがすぐ手に入らなくても、我慢することができる。
- 05 () 他児がルール違反していると注意する。
- 06 () じっくり考えてからでないと、行動に移れない。
- 07 () 誰かに自分の使っているおもちゃなどを「貸して」と言われたら、貸してあげられる。
- 08 () 積極的に「あれやろう、これやろう」と言って、友だちをリードできる。
- 09 () 引っ込み思案な方である。
- 10 () いやなことがあっても、感情をすぐに爆発せずに抑えられる。
- 11 () 自分の順番に他児が割り込んできたとき、「いけない、私の番だ」と言える。
- 12 () 神経質な方である。
- 13 () 人からいちいち注意されなくても、「してはいけない」と言われたことはしない。
- 14 () 何事も自分で決めないと承知しない。
- 15 () 新しいゲームや活動には最初は加わらず、そばで見ている。
- 16 () 忍耐強く、コツコツと取り組むたちである。
- 17 () 気に入ったことであれば、自分から率先してやりたいと言う。
- 18 () 知らない子どもに会うと恥ずかしがる。
- 19 () 勝ち負けのあるゲームで、たとえ負けてもそれを受け入れることができる。
- 20 () 他児からいやなことをされても、「いやとかやめて」と言える。
- 21 () 活発な遊びより、静かな遊びを好む。
- 22 () 約束ごとやきまりなどは、すぐに覚えて従う。
- 23 () 遊びたいおもちゃを他児が使っていると、「貸してとか私にもさせて」と言える。
- 24 () 一度気分を害すると、なかなか直らない。
- 25 () ブランコやスベリ台など、交代しながら使って遊べる。
- 26 () 表現はオーバーな方である。
- 27 () 決断するのに時間がかかる。
- 28 () 思いどおりにならないと、かんしゃくを起こす。
- 29 () 自分の気持ちを、ためらいなく表現することができる。
- 30 () 敏感なたちで、ちょっとした変化にも気づく。
- 31 () 一度言い出したら、他人の言うことに耳を貸さない。
- 32 () 入りたい遊びには、自分から「入れて」と言える。
- 33 () 何のためらいもなく、新しい活動や状況に入り込める。
- 34 () すぐにできないとしびれを切らして、他のことを始める。
- 35 () ケンカをしていたり、いじめられている子を見ると、先生（お母さん）に言いつけに来る。
- 36 () 困ったことがあるとメソメソしたり、泣き出してしまう。
- 37 () 「貸して」と言われても、気に入ったおもちゃや遊具は貸さない。
- 38 () 外のことに気をとられ、すぐに自分のしていることから離れてしまう。
- 39 () 「～しなさい」と言われても、「いやだ」と言って、我を押し通そうとする。
- 40 () 一人でできることでも、すぐに人に頼る。
- 41 () 他児から親切にされると、「ありがとう」のお礼が言える。
- 42 () 動作はのろい方である。
- 43 () 友達と仲良く遊ぶことが上手である。
- 44 () ゲームに負けると、すぐに不機嫌になる。
- 45 () 騒がしいところでも注意を逸らすことなく、自分のしていることに集中できる。
- 46 () 新しいものの好きで、常に変化を求める。

園 名			組・番号			お子さんの名前		
性 別	男・女	お子さんの生年月日	昭和	年	月	日生	出生順位	長子・次子・末子・その他

〈資料2の1〉

IV. 下の文を読んで、「自分によくあてはまるな」と思ったら1に、「自分にどちらかといえばあてはまるな」と思ったら2に、「自分にはあてはまらないな」と思ったら3に、それぞれ○をつけて下さい。（○のつけかたは、同じです。）

- | | よく
あてはまる | どちらかといえ
ばあてはまる | あてはまらない |
|--|-------------|-------------------|---------|
| 1. 親や先生から「待ってて」と言われれば、今やりたいと思うことでも我慢できる。 | 1 | 2 | 3 |
| 2. 友だちと遊ぶとき、自分のやりたい遊びややりたいことが、はっきり言える。 | 1 | 2 | 3 |
| 3. 新しいことをするのに時間が分かる。 | 1 | 2 | 3 |
| 4. ほしいものがすぐに手に入らなくても我慢することができる。 | 1 | 2 | 3 |
| 5. ほかに子がルールをやぶったら注意する。 | 1 | 2 | 3 |
| 6. じっくり考えてからでないと、行動できない。 | 1 | 2 | 3 |
| 7. だれかに自分の使っているものを「かして」と言われたら、かしてあげられる。 | 1 | 2 | 3 |
| 8. 自分から進んで「あれやろう」「これやろう」と言って友だちを引っ張っていきける。 | 1 | 2 | 3 |
| 9. 自分から進んで何かをやるといふほうではない。 | 1 | 2 | 3 |
| 10. いやなことがあっても、すぐに怒ったりしない。 | 1 | 2 | 3 |
| 11. 自分の順番なのにほかに子がわりこんできたら、「だめだよ、私のまんだよ」と言える。 | 1 | 2 | 3 |
| 12. 失敗したことなどをクヨクヨ考えてしまうほうである。 | 1 | 2 | 3 |
| 13. 人からいちいち注意されなくても、「してはいけない」と言われたことはしない。 | 1 | 2 | 3 |
| 14. なんでも自分できめないと気がすまない。 | 1 | 2 | 3 |
| 15. 新しい遊びやゲームなどには初めからなまにに入らないで、そばで見ているほうである。 | 1 | 2 | 3 |
| 16. なんにでも我慢強く、コツコツと取り組むほうである。 | 1 | 2 | 3 |
| 17. 気に入ったことであれば、自分から進んでやりたいと言いうほうである。 | 1 | 2 | 3 |
| 18. 知らない子に合うとはずかしい気持ちになる。 | 1 | 2 | 3 |
| 19. 勝ち負けのある遊びでたとえ負けてもあまり気にならないほうである。 | 1 | 2 | 3 |
| 20. ほかに子からいやなことをされても、「いや」とか「やめて」と言える。 | 1 | 2 | 3 |
| 21. 活発に動きまわる遊びより、静かな遊びのほうが好きだ。 | 1 | 2 | 3 |
| 22. 約束ごとやきまりなどはすぐに覚えてそれをまもるほうである。 | 1 | 2 | 3 |

〈資料2の2〉

23. 遊びたいおもちゃや道具（ボールなど）をほかの子が使っているとき、「私にもかして」と言える。
24. 一度いやだなと思うと、なかなか直らない。
25. おもちゃや道具など、友だちと交代しながら使える。
26. なにかを話したり、表現したりするとき、おおげさに言ったり表現したりする。
27. なにかを決める（決断する）のに時間がかかるほうである。
28. 思いどおりにいかないとおこってしまうほうである。
29. 自分の気持ちをすなおに話したり表現したりするほうである。
30. ものごとのちょっとした変化にもよく気がつくほうである。
31. いちど言い出したらほかの人の言うことは聞かないほうである。
32. やってみたい遊びや活動に自分から「いれて」と言える。
33. どうしたらいいかと悩むことなく、新しい遊びや仲間に入ることができる。
34. 今やっていることがすぐにできないと、ほかのことを始めるほうである。
35. ケンカをしていたり、いじめられている子を見ると先生やお母さんなどにいつけにいくほうである。
36. こまったことがあるとメソメソしたり、泣き出してしまうほうである。
37. 「かして」といわれても、気に入ったものはかせないほうである。
38. ほかのことに気をとられると、今、自分のしていたことをわすれてやめてしまうほうである。
39. 「なんとかをしなさい」と言われても、「いやだ」と言って人の言うことをきかないほうである。
40. 自分一人でするなと思っても、すぐ誰かに助けてもらうほうである。
41. ほかの子から親切にされたら、「ありがとう」とお礼が言える。
42. 動きがのろいほうである。
43. 友だちと仲良く遊ぶのは、上手である。
44. ゲームや勝負に負けると、すぐにきげんが落ちるほうである。
45. うるさかったりさわがしかったりするところでも、自分のしていることに集中できる。
46. 新しいものが好きである。